

to Paleogene sedimentary rocks including limestones (Bender 1983). Other habitats of the species are expected to be found on such Paleozoic sedimentary rocks in eastern Myanmar bordering on Thailand and Laos.

Uraria poilanei Dy Phon in Fl. Camb. Laos et Viêt. **23**: 109–110, pl. 19 (1987); Lock & Heald, Legumes Indo-China **79** (1994).

Voucher specimen. Myanmar. Magway Division, en route from Saw to Payunt, alt. 480m, Dec. 10, 2002, Jin Murata & al. 25276 (MBK, TUS).

Distribution: Thailand, Laos and Myanmar.

We thank Professor Jin Murata of University of Tokyo for his help during our studies and Dr. Kazutaka Amano of Joetsu University of Education for giving us information on the geology of Myanmar. This study was supported by Grants-in-Aid from the Japanese Ministry of Education, Science, Sports and Culture (No. 13375003 to J. Murata).

オオユリワサビ (アブラナ科) の北限産地 (米倉浩司)

Koji YONEKURA: The Northernmost Habitat of *Eutrema okinosimense* Taken. (Brassicaceae)

オオユリワサビ *Eutrema okinosimense* Taken. は、福岡県沖ノ島から記載されたアブラナ科ワサビ属の多年草である。この植物は沖ノ島の固有とされ、分類学的実体が不明のまま絶滅したものと永く考えられてきたが、鳴橋他 (2000) によって明瞭な独立種とされ、本州の日本海側にも分布していることが明らかにされた。鳴橋他 (2000) によれば、本種の北限は太平洋側では岩手県北部、日本海側では秋田県鹿角市とされているが、証拠標本は引用されていない。

筆者は、2000年5月に青森県十和田湖町の

References

- Dy Phon P. 1987. *Uraria*. In: Nguyễn van Thuân, Dy Phon P. and Niyomdham C., Flore du Cambodge du Laos et du Vietnam. **23**: 95–116. Muséum National d'Histoire Naturelle, Laboratoire de Phanérogamie, Paris.
- Bender F. 1983. Geology of Burma. 293 pp. Gebrüder Borntraeger, Berlin.

Uraria poilanei Dy Phon はマメ科フジボグサ属の低木で、これまでタイおよびラオスの石灰岩地帯の林内に分布することが知られていた。五百川と根本は2002年12月のミャンマー中西部の植物調査において、マグウェ行政区西部の丘陵地林内の道路沿いで同種の植物を採集した。これは、同種のミャンマーにおける最初の記録である。これによって同種の分布域はインドシナ半島においてより西方にも広がりを持っていることが明らかとなった。現地では林内の道路沿いに点々とこの植物が生育しており、また、タイおよびラオスと接するミャンマー東部には石灰岩地帯も多くあることから、ミャンマーにはさらに多くの生育地が存在する可能性がある。

(*上越教育大学自然系生物学教室,
*石巻専修大学理工学部基礎理学科,
*東北大学大学院理学研究科
附属植物園津田記念館)

奥入瀬溪流の北端にある十和田発電所付近でユリワサビに似たワサビ属植物を発見し、不審に思っていたが、鳴橋他 (2000) にもとづきこれがオオユリワサビであることに気づき、翌年に改めてそこを訪れて確認した。青森県では初記録であり、新たな北限産地となる。十和田発電所付近では、ハルニレやサワグルミ、タニガワハンノキ等からなる河畔林下に、ニリンソウ、ツクバネソウ等と混生して数ヶ所に数個体ずつ見られるが、あまり多くはない。証拠標本は東北大学八甲田山植物実験所の標本庫とTUSに保管されている。なお、



Fig. 1. *Eutrema okinosimense* Taken. in Towadako-machi, Aomori Prefecture.
Photograph taken on 5 May 2003.

村井 (1935) は、奥入瀬溪流にユリワサビ *E. tenue* が産するとしている。筆者はユリワサビを奥入瀬では見たことがないので、あるいはこれはオオユリワサビのことではないかと考えられるが、青森営林局にあったと考えられる証拠標本は戦災で失われ、重複標本も確認できない。奥入瀬溪流には、ヒトツバテンナンショウ等の日本海側の暖地に見られる植物が北上しており (村井 1935)、本種もその一つであろうと考えられる。

なお、ワサビ属の属名 *Eutrema* はしばしば

女性名詞とみなされているが、これは誤りで中性名詞であるので、種形容語の語尾は *okinosimense* としなければならない。

Eutrema okinosimense Taken. in Fukuoka Hakubutsugaku Zasshi 1: 369 (1935); Naruh., K.Umemoto & T.Wakasugi in J. Phytogeogr. Taxon. 48: 147, fig. 2 (2000), '*okinosimensis*'.

Wasabia tenuis (Miq.) Matsum. var. *okinosimensis* (Taken.) Kitam. [in Kitam. & Murata, Col. III. Herb. Pl. Jap. 2: 177 (1961), comb. nud.] in Kitam. & Murata in Acta Phytotax. Geobot.

20: 201 (1962).

Eutrema tenue (Miq.) Makino var. *okinosisimense* (Taken.) Ohwi in Ohwi & Kitag., New Fl. Jap.: 754 (1983), comb. nud., '*okinosisimensis*'.

The northernmost habitat: **Japan**: Honshu, Aomori Pref., Kamikita-gun, Towadako-machi, Yakeyama, S. of Towada hydroelectric power plant, 140°56'40"-50"E, 40°33'50"-34'00"N, alt. ca. 230 m (K. Yonekura 5211, 6 May 2000, TUS); N. of Towada hydroelectric power plant,

140°58'50"E, 40°34'00"-10"N, alt. ca. 220 m (K. Yonekura 6730, 6 May 2001, Herb. Mt. Hakkoda Bot. Lab., TUS).

引用文献

村井三郎 1935. 十和田湖・八甲田山の植物. 207 pp. 青森営林局.

鳴橋直弘, 梅本康二, 若杉孝生 2000. オオユリワサビ, その生活と分類学的位置. 植物地理・分類研究 48: 141-148.

(東北大学大学院理学研究科
附属八甲田山植物実験所)

新刊

□栃木県自然環境調査研究会植物部会(編): とちぎの植物 I 534 pp. ¥2,150, II 534 pp. ¥1,790, 2003. 送料 ¥770. 栃木県林務部自然環境課.

1994年から6年間にわたって行われた, 県自然環境基礎調査のまとめである. Iは維管束植物目録で, 科の中は種の学名順に配列され, それぞれに簡単な説明と標本や文献による産地が列記されている. 検索表など, 同定を目的とした記述は省かれている. 巻頭の総論の中で, 1968年発行の栃木県植物目録と比較した種の消長が記されているが, キキョウは普通から希少, アツモリソウ・クマガイソウは産地10箇所前後から今回は発見できず, エビネ・サギソウも普通から産地僅少と, 顕著な減少が見られる一方, 帰化植物の増加が述べられている. また温暖化によるとみられる暖地性シダの増加や, サネカズラ, モチノキ, カラタチバナ, タブなど, 以前の希少種や未記録種の進出が注目されている. 154種の三次メッシュによる県内分布図が示されているが, 本調査以前の多数の標本は, メッシュ系が異なるとの理由で排除されており, 少々もの足りない感じがする. メッシュ系の違いは, 表示メッシュを選択することによって解消できるので, 工夫してほしかった. そうしないと, 三次メッシュでは記録できない過去のデータを利用できないことになり, 産状の時間的変化を追うことができなくなる. 分布

図は, 表示メッシュが細かい方がよいと思われる勝ちだが, そうとは限らない. 巻末に文献目録がある.

IIはこの調査の収集標本目録で, 4万点を超える標本の番号, 産地, 高度, メッシュコード, 採集年月日, 採集者が記録されている. メッシュコードは2.5万図名に図内のコードを付加したもので, こういう県単位の記録には実用的だと思う. 数字だけの表示は誤り易いという, 直観的にどこらあたりかがわからないからである.

入手については〒320-8501 栃木県情報公開班 (Tel 028-623-2037) へ, 現金書留で申し込むこと.

IIは明らかにデータベースの産物と思われるので, その分与について問い合わせたところ「データベースは作っていない」という返事で, 大変意外だった. たとえ執筆側でそういうものを作っていないとしても, 今日では製版側でデータ化されている筈なので, それを利用することは可能と思う. さもないと, これだけの整ったデータを, みすみす失う結果になるだろう. おそらく電話口に出た者の知らないところで, そういう手配はされていることと思うが, 老婆心までにつけ加える.

(金井弘夫)